

体験版

エンジニアありさ、

淫らな三百六十五日

シリーズ1

「私の部屋で、部長に溶かされて」

朝倉 楓
Kaede Asakura

体験版

エンジニアありや、淫らな二日六十五日

シリーズ1

～私の部屋で、部長に溶かされて～ 第一巻（全三巻）

©2025 朝倉 楓 All rights reserved

無断転載・二次利用を禁じます。

この物語のあらすじ

優しい恋人ダイスケを大切にしているはずなのに——ありさの身体は、すでに佐藤の愛撫を求めるように変わり始めていた。

家族を持つ男の祖先、口づけ、触れ方。そのすべてが、彼氏との“普通の愛”では埋まらない欲望を呼び覚ます。

罪悪感、切なさ、そして止められない疼き。

心と身体が別の方向を向き始める、背徳が加速する第二巻。

本作はフィクションです。登場する企業・団体・人物はすべて架空であり、実在のもとは一切関係ありません。



目次

Day 4	感情と感覚	...	4
Day 5	クンニリングス	...	
Day 6	フ ハラチオ	...	28

Day 4 感情と感覚

二〇一三年六月一日 木曜日

今週は、佐藤さんが海外出張に行っていて、私の部屋には来てくれなかつた。メールが一通だけ届いた。

「シンガポール着 残業続きだけど、君のことを思い出してるよ。白沢さんの胸の感触が忘れられない」

たつた一行で、胸が熱くなつた。

ワールドワイドに活躍するビジネスマンとしての佐藤さんも、すごく素敵だと思う。

……あれ、私、体だけじゃなくて、心も惹かれ始めてる?

でも、佐藤さんは既婚者。

このまま行くと不倫になっちゃう。

そんな複雑な気持ちで過ごしていると、ダイスケからLINEが来た。

「週末、ありさに会いにいくよ！ 土曜の朝イチの飛行機で！」

そうだ、私には優しい彼氏がいるんだ。

「嬉しい！ 待ってるね♡」

即返信した。

土曜日の朝、羽田空港の到着出口でダイスケを待つ。

久しぶりに見るダイスケは、変わらず優しい笑顔で、私をぎゅっと抱きしめた。

「ありさ、元気だった？ なんか痩せたみたい？」

「ううん、仕事忙しいけど大丈夫だよ」

遊園地でデート。

手をつないでジェットコースターに乗り、ポップコーンを分け合って笑い合う。

ダイスケの隣は、やつぱり安心する。

大学の軽音部で出会った頃の、懐かしい温かさ。

でも、ダイスケの手が私の腰に回るたび、佐藤さんとの三週間のレッスンが頭を

よぎる。

(佐藤さんの手は、もつと熱くて、もつと強引で……)

夜は都内のホテルに泊まつた。

ダイスケは私のアパートに来たがつたけど、「今日は特別にホテルにしようよ」と誤魔化した。

本当は、佐藤さんの匂いが染みついた部屋を見せたくなかつた。

部屋に入つて、シャワーを浴びてからベッドへ。

ダイスケが優しくキスをしてくる。

唇が触れるだけ。舌を軽く絡めるけど、すぐに離れる。

(佐藤さんのキスは……舌を深く入れて、唾液を交換して、息が苦しくなるまで続いて……「もっと舌を出して」って導いてくれたのに……)

私は目を閉じて、ダイスケの舌を追いかけるけど、ダイスケはすぐに止めてしまう。

「ありさ、かわいいよ」

次に、ダイスケの手がおっぱいに伸びる。

ブラウスを脱がせて、ブラの上から優しく揉む。

「ありさのおっぱい、柔らかいね」

ホックを外して、直接触れる。

でも、すぐに乳首を指で摘むだけ。

軽く撫でて、優しく吸う。

（佐藤さんは……全体を丁寧に揉みほぐして、焦らして、褒めながら……「こんなに綺麗なおっぱいは初めてだ」って何度も言つて、乳首を甘噛みして……）

ダイスケの指は優しいけど、物足りない。

乳首が少し硬くなるけど、疼きは浅い。

「感じてる？ ありさ」

「うん……ダイスケ、優しいね」

でも、心の奥で、もつと強く……もつと執拗に……と叫んでしまう。
ダイスケがパンツを脱いで、ゴムを付ける。

私はベッドに横たわり、ダイスケのチンポを見る……小さい。

先週、私の胸で包んだ佐藤さんの龍みたいな凶暴なチンポを思い出す。ダイスケのは、やっぱり可愛い子犬のしつぽみたい。

細くて、ちょっと曲がってて、ピンクで、柔らかさが残る。

匂いも優しい石鹼の香り。

佐藤さんのそれは、鉄のように硬くて、青筋が浮き立つて、獣のフェロモンみたいな匂いがして……

でも、佐藤さんのチンポを思い浮かべただけで、下が熱くなつて、ぐしょぐしょに濡れてくる。

ダイスケはそれを見て、嬉しそうに微笑む。

「ありさ、すごく濡れてるね。感じてるの？俺でこんなに興奮してくれて、嬉しいよ」

私は強烈な罪悪感に胸を締めつけられる。

（ごめん、ダイスケ……これは、あなたのせいじゃない。佐藤さんの凶暴なチン

ボを想像してるから……）

集中しようと、ダイスケの顔を見つめて、キスを求める。
いよいよ挿入。

ゴム付きの小さなチンポが入つてくる。
ぬるつと入るけど、壁を軽く擦るだけ。

奥まで届かない。広がらない。

ダイスケは腰を動かすけど、リズムが単調ですぐに息が上がる。

「ありさ、好きだよ……あっ、出る……！」

すぐに果てる。

ゴムの中に熱いものが溜まる。

私はイケなかつた。

でも、真つすぐに愛してくれるダイスケの顔を見て、幸せな気分にはなる。

……でも、体は疼いたまま。

佐藤さんの舌や指、胸を犯したあの凶暴なチンポが頭から離れない。



日曜の午後、羽田空港でダイスケを見送る。

「また来月来るよ。ありさ、愛してる」

「うん、私も。気をつけてね」

モノレールで帰る途中、国際線ターミナル駅で、偶然、佐藤さんが乗ってくるのが見えた。

横には奥さんと、小さな男の子。

「お父さん、シンガポール楽しかった？」

男の子がお土産の袋を持つてはしゃいでいる。

佐藤さんは優しい父親の顔で、奥さんの肩を抱き、子供の頭を撫でている。
私は気づいていない。

その姿を見て、胸がズキンと痛んだ。

(佐藤さんには、家族がいるのに……私には、ダイスケがいるのに……)
ダイスケへの愛、満足できないセックス。

佐藤さんへの叶わぬ想い、開発されて疼き続ける体。

チグハグな感情と感覚に、頭がぐちやぐちやになる。
家に帰って、ベッドに倒れ込む。

佐藤さんの精液の匂いが残るティッシュは、もう捨ててしまった。
代わりに、ベビーオイルのボトルを手に取り、胸にたっぷり塗りながら、自分を
慰める。

指を下に滑らせ、あの凶暴なチンポを想像して、

「佐藤さん……欲しい……早く木曜日が来て……」

体がビクビクと震え、涙がこぼれた。

学んだこと..

ダイスケの優しいセックスは、心を少しだけ満たすけど、体はまったく満たしてくれない。

佐藤さんのレッスンで開発された私の体は、もう普通のチンポじゃいけない。

佐藤さんの家族を見ても、想いは止まらない。

罪悪感と疼きが混じり合って、次の木曜日を、狂おしいほど待ち望む自分になってしまった。

（続きを読むで・・・）